

# 学習指導要領の特色を活かした小説教材の学習指導の工夫

小説「羅生門」（芥川龍之介）の場合

矢原豊祥

## 1 はじめに

高等学校における新学習指導要領（平成二十一年三月）が示された。改訂の方針の一つに、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむ」ことがある。このことを踏まえ、新教育課程では、各教科等における言語活動の充実を図ることが重視されている。国語科においては、「言語に関する能力を育成する中核を担う教科であることを踏まえ、社会人として、また各教科等における学習に必要な能力を身に付けるため、討論、説明、創作、批評、編集などの言語活動を充実」させることを図っていくことが求められている。

本稿では、新学習指導要領の特色を整理し、そこで求められている学力の特徴を明らかにし、その学力の習得を目指すために、新学習指導要領の特色である「言語活動」を活かした授業の在り方について提案したい。また、本校では、高等学校第一学年【国語総合】

現代文分野における「羅生門」（芥川龍之介）を取り上げて構想・計画・実践・考察を行った。本単元は「比較」を通した「批評的な読み」を目指したものである。

「比較」という活動を通して学習者の読みにとどのような地平が拓けるのであろうか。芥川龍之介「羅生門」に、原典「今昔物語」との比較という第一の「装置」を仕掛け、学習者の視点を「羅生門」の結末部分の表現へと焦点化させる。「羅生門」の結末部分の表現に関わる初稿と改稿の比較という第二の「装置」により、芥川龍之介が何を残し、何を創りあげたのかという、「新たな読みの地平」を拓かせたい。「自立した読者」の育成に向けた第一歩として、批評レベルの読みの目標達成に向けて、新学習指導要領の特色を活かした授業モデルとしての提案としたい。

## 2 学習指導要領の検討と「国語総合」「読むこと」

新学習指導要領における【国語総合】の「読むこと」に関する指

導事項を現行の学習指導要領と比較すると、表1（傍線部筆者）のようになる。傍線部は新たに追加変更された点である。一目見ただけで、今回の改訂で学習指導要領がいかに色濃くなったかが伺える。指導事項については、「文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと」「詳述」「文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること」「幅広く本や文章を読み、情報を得て用いたり、……豊かにしたり」等が追加変更されている。また、言語活動例が、「内容の取り扱い」から「内容」に移動され、具体的に記述されている。以上の追加変更の記述から浮かび上がるのは「論理」の重視、「評価・批評読み」の重要性、「実の場」に向けた学力の育成等である。それは、「自立した読者」という最終的な学習者像を目標としたものといつてよい。

その背景には、二十一世紀が「知識基盤社会」「グローバル化社会」の時代であり、その中で「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になるという認識がある。一方、OECD（経済協力開発機構）のPIISA調査など各種の調査から見られる課題（思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題が見られていること）も影響を与えている。

表1 【国語総合】「読むこと」に関する指導事項の比較

(1) 次の事項について指導する。  
ア 文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと

現行学習指導要領	新 学 習 指 導 要 領
<p>次の事項について指導する。</p> <p>ア 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約したりすること。</p> <p>イ 文章を読んで、構成を確かめたり表現の特色をとらえたりすること。</p> <p>ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。</p> <p>エ 様々な文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりすること。</p>	<p>イ 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること。</p> <p>ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。</p> <p>エ 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること。</p> <p>オ 幅広く本や文章を読み、情報を得て用いたり、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしたりすること。</p> <p>(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。</p> <p>ア 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること。</p> <p>イ 文字、音声、画像などのメディアによって表現された情報を、課題に応じて読み取り、取捨選択してまとめること。</p> <p>ウ 現代の社会生活で必要とされている実用的な文章を読んで内容を理解し、自分の考えをもつて話し合うこと。</p> <p>エ 様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。</p>

### 3 教材について ～「羅生門」(芥川龍之介)～

### 4 授業構想

- (1) 高等学校第一学年 国語総合・現代文分野
- (2) 教材名「羅生門」(芥川龍之介)
- (3) 教材について

本単元は高等学校における初めての小説単元である。教材としては、芥川龍之介の「羅生門」を用いる。登場人物の心情の変化を読み取る方略を教えるうえで、「羅生門」は適切な教材といえる。

「羅生門」では主人公「下人」が盗みを働くまでの心情の変化が詳述されている。本教材における「下人」の心情の変化を本文の記述をもとに読み取らせていく活動は重要な意義がある。

「羅生門」は「今昔物語」巻二十九の第十八「羅城門登上層見死人盗人語」(資料1)を主な原典とする作品である。「羅生門」と原典の骨格はほぼ同じである。(共通点と相違点についての詳細は資料2を参照。)比較をする中で見えてくるものは、芥川が「羅生門」において描きたかった「人間」のエゴイズムの問題である。その意味で、原典「今昔物語」は生徒に「羅生門」を創りあげた芥川の存在を大きくクローズアップさせる媒介となる。

また、「羅生門」の本文について、芥川自身による結末の書き換えがおこなわれている。(詳細は資料3を参照)主人公「下人」のその後を考えていく活動の中で、結末の書き換えについて触れることは、効果的な表現の在り方を学ぶだけでなく、芥川龍之介の描きたかった作品世界に触れる契機となると考えた。

新学習指導要領で求められている学力は、「自立した読者」を目指す方向である。その一つの特徴として「批評的な読み」がある。関連する主な指導事項としては「エッセイの構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること。」である。

「批評的な読み」を目指した「羅生門」の先行実践としては、例えば、松本誠司(2006)があげられる。松本氏は、「羅生門」を通じた学習者の対話的交流を目指し、個人内の読みを集団の読みに関わらせていく活動を設定している。松本氏は、実践を通し、「『作者』に注目することで物語内容への批評意識の読み取りに近づける」という観点を示している。これまでも自覚的な教師(実践者)は松本氏のように既に「自立した読者」を目指す取り組みを行っている。しかし、学習指導要領という公教育の規準に示されたという意味では、自覚的な教師だけではなく、多くの教師に広く意識されなければならぬ。その一つの方略として、言語活動をその学習過程に位置づけたいと考える。

新学習指導要領の特色である言語活動をどう位置づけるか。言語活動は、授業における指導目標(身に付けたい言語能力)の実現のために、生徒のそれまでの学習歴や言語能力の実態を踏まえ、意図的・計画的に設定する学習活動である。効果的な言語活動が行われるためには、領域を超えて総合的に設定し、言語活動が関連的に行

われるようにすることが重要である。関連する主な言語活動例としては「エ 様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。」が挙げられる。

本単元では、「批評的な読み」の育成の充実を図ることと読むことの方略を身に付けるために、小グループやペアによるディスカッション等の言語活動を学習過程に位置づけた（学習過程モデル）を構想した。ここでは、「確認的な読み」と「批評的な読み」の2種類の「読み」の存在を明記している。「確認的な読み」とは、何が、どのように書かれているかを文章に即して理解し、確認する読みである。書かれていることを的確に読み取る学習が中心となる前半では「確認的な読み」が大部分を占める。一方、「批評的な読み」は初発の感想にわずかながら見られるはずである。第3次の「比較」の活動を機会とし、その「批評的な読み」が増幅し、批評意識が高まっていくと想定し、図1のような（学習指導要領の特色を活かした学習過程モデル）を作成した。

第1次では、小説の舞台設定を確認させる。ここは分析の視点をしっかり教えて、考えさせていく授業である。第2次は、登場人物の心情の推移を場面ごとにとらえていく学習である。この第2次までは、初発の感想に見られた「批評的な読み」に関する疑問点等を踏まえながらも「確認的な読み」が中心となる。

第3次では表現や構成の工夫に着目する。下人の「にきび」の描写に触れたり、比喩表現の効果について協議したりする。ここではディスカッションを多く取り入れる。また、原典となる「今昔物語」を読み比べ、内容・表現・構造の在り方について整理することを通

し、芥川龍之介が「羅生門」を描くうえで「残したものと」「創りあげたもの」を見つめさせる。その中で、結末の一文に注目させ、「下人の行方」について考えさせながら、結末の書き換えについて触れ、その効果について考えを深めさせる。作者の仕掛け（工夫）に気付き、小説のおもしろさを味わわせるとともに想像力・感受性を豊かにさせたいとした。

第4次では、自由なテーマで課題レポートを書かせ、そのレポートを通してディスカッションを行う。「羅生門」を様々な視点で捉え直し、自らの読みをさらに深化させたいと考えた。

図1 「学習指導要領の特色を活かした学習過程モデル」

1次	初発の感想、小説の舞台設定の確認	確認的 な読み
2次	場面ごととの登場人物の心情の推移を確認 (ディスカッション)	
3次	今昔物語集との比較、末尾の一文の改稿を比較 (ディスカッション)	
4次	課題を設定し、レポートにまとめる (レポート) レポートを交流し、学習を振り返る (ディスカッション)	
		批評的 な読み

※ ( ) 内は言語活動

指導においては、「自立した読者」の育成に向け、教えるべきところを明確にし、しっかり考えさせ、課題の追究に向けた積極的な伝



展開 2	展開 1		導入	
<p>4 作品における特徴的な表現についての読み深め</p> <p>○末尾の一文の表現効果について考え</p> <p><b>問</b> 芥川の末尾の表現はどのような効果をもたらせるだろうか？</p> <p>○芥川龍之介による末尾の一文の書き換えの事実を紹介し、その意図について考えさせる。</p>	<p>○「羅生門」とその原典の共通点と相違点を整理し明らかにすることができる。 (交流、発表等の様子)</p>	<p>(3)登場人物の心理について</p> <p>(2)表現の仕方について</p> <p>(1)舞台設定や内容について</p> <p>○原典との比較をおこない共通点と相違点を整理する。</p> <p>○複数の根拠もとにしたり、比較したりして意見を述べているかどうか、根拠となる情報に偏りがなく述べられているかどうかを指摘する。</p> <p>○発言された答えとその根拠の整合性や是非を評価する。</p>	<p>3 作品の構造・構成の把握</p> <p>○本時の学習内容と目標を知る。</p> <p><b>問</b> 芥川は何を残し、何を創ったのか？</p> <p>○二つの作品を(例「Aは〜であるが、一方Bは〜である。’)のように比較して意見をまとめるなど発表につながるようにアドバイスをする。</p> <p>○本時の学習内容と目標を説明。</p>	<p>学習活動</p> <p>指導上の留意点</p> <p>1 前時の振り返り</p> <p>○前時の学習内容と予習の課題を確認する。</p> <p>○予習課題を確認する。</p> <p>○これまででの学習を振り返らせる。</p> <p>○予習として、今昔物語の原典との比較をワークシートにしておくように指示しておく。</p>

まとめ	展開 2
<p>5 学習のまとめ</p> <p>○自己評価を行う。</p> <p>○学習成果の確認。</p> <p>○次時の学習内容を確認する。</p> <p>○感想文を書かせる。</p> <p>○本時の成果と課題を評価する。</p> <p>※レポート課題を後日指示する。</p> <p>評価【関心・意欲・態度】【読む能力】</p> <p>○芥川龍之介の「描き方」「物語の構造」に対する関心を深め、小説のおもしろさを味わうことができる。(交流、発表、感想文の様子)</p>	<p>る。</p> <p>○「下人」のその後を考える中で多様な意見が出てきたことを踏まえて考えをまとめさせる。</p>

## 6 考察〜学習者の反応〜

(1) 初読の反応

初読の感想によると、作品の舞台設定(時代背景や社会状況)について理解に苦しみながらも、多くの生徒が下人の心情の変化について触れている。その生徒の反応の中で特筆すべきは、次の①〜③のように、作者の「仕掛け」や「物語の構造」に関わる疑問等が二割前後存在していることである。これは「批評的な読み」の存在ともいえるであろう。

- ① 語り手の存在に触れているもの。↓9名(40人中)  
 ② 下人の「にきび」について触れているもの。↓10名(40人中)  
 ③ 結末の表現に触れているもの。↓7名(40人中)

例えば、次のような記述は、「批評的な読み」の傾向である。  
 ○「旧記によると」「作者はさつき」など、物語の外のメタ的な視点や作者が顔を出すとところがなかなかおもしろいと思った。  
 ○「下人の行方はだれも知らない」とあるが、下人の行方が気になる。

○なぜ「にきび」を強調させるのか。

(2) 第3次第7時「今昔物語」との比較や結末についてのディスカッション後の反応

あらかじめ原典(資料1)を渡し、比較したことをまとめさせていたこともあり、小グループにおけるディスカッションは活発に行われていた。授業の前半では、古典「今昔物語」と読み比べ、内容・表現・構造の在り方について整理することを通し、芥川龍之介が「羅生門」を描くうえで「残したものと」「創りあげたもの」を見つめさせた。その中で、結末の一文に注目させ、「下人の行方」について考えさせながら、結末の書き換えについて触れ、その効果について考えさせた。以下のように、作者の仕掛け(工夫)に気付き、小説のおもしろさを感じている反応が多く見られた。

○もともなった作品と比べることで、芥川龍之介のこだわりみたいなのが見られたように思います。また、「行方は知らない」という効果や、自分たちで行方を考えることができて良かったと思う。

○結末をはっきり書くのではなく、行方を知らないという言葉で終えることによって、読者をよりこの小説に引き込ませる効果があることがわかった。

(3) レポートの反応

第3次後に、課題レポートを与えた。内容は、「羅生門」(芥川龍之介)の学習を振り返り、各自でテーマ(課題)を設定し、レポート(A4)用紙にまとめるといふものである。テーマ設定は自由に、2週間の期間を与えて提出させた。

レポートは様々なテーマでまとめられていたが、「今昔物語」との比較をまとめたもの(13名)、末尾の一文の効果についてまとめたもの(6名)など、第3次で扱った内容に関するものも少なくなかった。学習者が設定したテーマの一部を以下に示す。

授業で扱った内容を深めてみようというものが、授業では扱わなかった内容に取り組んだものなど様々であったが、すべての生徒が「批評的な読み」を行っていた。原典「今昔物語」は生徒に「羅生門」を創りあげた芥川龍之介の存在を大きくクローズアップさせる媒介となったといえよう。また、結末の書き換えについて触れたことをはじめとして、効果的な表現の在り方を学ぶことが、芥川龍之介の描きたかった作品世界に触れる契機となったと考えられる。

【課題レポートのテーマ】

- 「羅生門」の終わり方について  
 ○「今昔物語集」と芥川龍之介「羅生門」の違い  
 ○芥川龍之介「羅生門」と「今昔物語」の内容が時々違う理由  
 ○芥川龍之介があらわした男「今昔物語」との比較より

○ 芥川龍之介が「今昔物語集」から「羅生門」にすることに  
よって得た効果

○ 芥川龍之介はなぜ「羅城門」を「羅生門」としたのか

○ 芥川龍之介の表現技法による効果とは何か

○ 「羅生門」に出てくる動物の描写とその効果

○ 老婆の視点で物語をとらえ直す

○ 「下人のにきび」に関する記述について

○ 青年期の視点で見た下人の心情変化

(4) レポート交流後の反応

レポート交流では、四人程度のグループを作り、それぞれのレポートを報告しあい、デイスカッションを行った。デイスカッションはグループを変えて二回行ったので一人が六人程度の報告を聞くようになった。これまでの学習を踏まえながらも、それを超えたデイスカッションであったことがその後の感想に現れていた。

また、生徒たちとの日常会話の中や個人面談などでは、「小説の読み方がわかったように感じます。」「小説の授業が好きです。」「芥川龍之介の小説を読もうと思います。」等のコメントを得た。「批評的な読み」を目指してきたが、それは作者の表現や構成などの工夫を細部までこだわって読もうとする方略、または姿勢として身に付いていれば幸いである。以下に生徒の感想の一部を示す。

○ レポート交流をしてみて、印象に残ったレポートがいくつかありました。まず、「今昔物語との比較」のなかで、老婆の言い訳が改変されていることについて、「悪を認めたくなくて正当化」したのは、読者に「悪」について考えてほしいという問題を提起

しているというのは納得しました。

○ たくさんの方の意見を聞いて、同じ物語を読むということでもいろいろな読み方があると思った。さらっと読んでいったとき、「羅生門」では特に何も感じず、ただ怖い話という印象しか受けなかった。しかし、このようにしてじっくりと読んでいくと感じることも多くて驚いた。

○ 説明文と違い、小説は作者の主張を書いてある訳ではありません。けれども、作者の作り出した世界には、必ずなぜそうしたのかという意図が含まれているし、その小説を通して伝えたいことをこっそり隠しているものもあります。明確に主張が書かれていない分、小説を「ただ楽しむ読み方」でない読み方で読むときは、説明文より難しいのではないのでしょうか。

○ もしかすると、一つの小説に対してこのように長い時間をかけて熟読するということは初めてだったかもしれません。一文一文を注意深く、落としたコンタクトを見つけるかのように読んでいくのは小説を「読む」というよりも暗号を「解読する」という感じでした。

○ 普段の私の小説を「読む」という行為は娯楽に近いものなので、今回の授業のような行為は、私の中ではあまり「読む」という感じはしないのですが、これを機に普段の私の「読む」もたまたまは今回の授業の「読む」に近づけてみるのも大切なのではと思いました。

(5) まとめ

単元を通して、生徒たちにはたくさんの方の記述をさせた。それらの

傾向から、次のような成果を挙げることができる。

- ① 小説『羅生門』のおもしろさを味わい、この作品に対して「批評的な読み方」を身に付けることができた。
- ② 場面や人物の心情を的確に読み取り、内容及び主題の把握につなげていく過程で、すぐれた描写、効果的な表現について学ぶことができた。

③ 言語感覚を磨くとともに、想像力・感受性を豊かにすることができた。

今後の課題点は、今回の授業で培った力が次の学習にどうつながっていくかという点である。指導においては、言語活動をどう指導過程に位置づけるかということを検討していく必要がある。今回は有機的に働いていたと思うが、言語活動そのものが目的となつて終わる危険性も考えられる。

## 7 おわりに

新学習指導要領に見られる「批評的な読み」のレベルを明らかにし、その育成を目指して、新学習指導要領の特色である言語活動をどう位置づけるかを工夫してきた。それは授業における指導目標（身に付けたい言語能力）の実現のために、生徒のそれまでの学習歴や言語能力の実態を踏まえ、意図的・計画的に設定する学習活動であることを再認識させるものであった。

「自立した読者」という最終的な学習者像を目標にし、そのために教師がどれだけ「指導」という介入をし、しだいにその「指導」と

いう介入を少なくしていくかが明確にされていかなければならない。今後、本稿で考察した内容に加えて、「自立した読者」に必要な「読解力」を育てる学習指導システム作りの基礎となる考察を展開していきたいと考える。

（広島県立広島中・高等学校）

### 参考文献

- 山元隆春「文学教育基礎論の構築 読者反応を核としたリテラシー実践に向けて」(渓水社 2005)
- 林廣親『羅生門』私考、楼上の〈舞台〉と下人の〈気分〉をめぐる視点から」(〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ、文学研究と国語教育研究の交差) 田中実・須貝千里編著 右文書院 2003)
- 田近洵一「羅生門」研究 その教材価値論への視点」(〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ、文学研究と国語教育研究の交差) 田中実・須貝千里編著 右文書院 2003)
- 松本誠司「読むことの対話的交流を目指す授業 芥川龍之介『羅生門』による学習者の読みの交流」(国語教育研究 第四七号 広島大学国語教育会 2006)
- 大高知見「羅生門」という物語と二つの『旧記』(三省堂指導書 作品解説 2008)
- 高等学校学習指導要領「国語」(文部科学省 2009)

## 「今昔物語」 卷二十九の第十八 「羅城門登上層見死人盗人語」

今は昔、摂津の国辺より、盗みせむがために京に上りける男の日のいまだ暮れざりければ、羅城門の下に立ち隠れて立てりけるに、朱雀の方に人しげくあるきければ、人の静まるまでと思ひて、門の下に待ち立ちてけるに、山城の方より人どものあまた来たる音のしければ、それに見えじと思ひて、門の上層にやはら掻きつき登りたりけるに、見れば、火ほのかにともしたり。

盗人、怪しと思ひて、連子よりのぞきければ、若き女の死にて臥したるあり。その枕上に火をともして、年いみじく老いたる傭の白髪白きが、その死人の枕上にゐて、死人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。

盗人これを見るに、心も得ねば、これはもし鬼にやあらむと思ひて恐ろしけれども、もし死人にてもぞある、おどして試みむと思ひて、やはら戸を開けて、刀を抜きて、「おのれは」と言ひて走り寄りければ、傭、手まどひをして手をすりてまどへば、盗人、「こは何ぞの傭のかくはしむたるぞ」と問ひければ、傭、「おのれが主にておはしましたる人の失せたまへるを、あつかふ人のなければ、かくて置きたてまつりたるなり。その御髪の長に余りて長ければ、それを抜き取りて鬢にせむとて抜くなり。助けたまへ」と言ひければ、盗人、死人の着たる衣と傭の着たる衣と、抜き取りてある髪とを奪ひ取りて、下り走りて逃げていにけり。

さて、その上の層には死人の骸が多かりける。死にたる人の葬りなどえせぬをば、この門の上にぞ置きける。このことは、その盗人の人に語りけるを聞き継ぎて、かく語り伝へたるとや。

## 【現代語訳】

今となつては昔のことだが、摂津の国のあたりから、盗みをしたよとするために京に上つた男が、日がまだ暮れなかつたので、羅城門の下に隠れて立つていたところ、朱雀大路の方で人がたくさん歩いていたので、人が静まるまでと思つて、門の下で立つて待つていたところ、山城の方から人々がたくさん来ている音がしたので、その人たちに（姿を）見られまいと思つて、門の二階にそつとよじ登つたところ、（そこを）見ると、火がほかに灯つていた。

盗人が奇妙だと思つて、連子窓からのぞいたところ、若い女で死んで倒れているのがいた。その枕元で火を灯して、年がたいそう老いている老婆で白髪なのが、その死人の枕元に座つて、死人の髪の毛を手荒く抜き取るのであつた。

盗人はこれを見ると、訳がわからないので、これはもしかしたら鬼だろうかと思つて恐ろしく思つたが、万が一死人だつたら困るなあ、試しに脅してみようと思つて、そろりと戸を開けて、刀を抜いて、「お前は」と言つて走り寄つたところ、老婆はあわてて手をすつてうろたえるので、盗人は、「これはどういふばあさんがこんなことをしているのか」と問うたところ、老婆は、「私の主人でいらしゃつた方がお亡くなりになつたのを、（死後の）世話をする人がいないので、このように置き申し上げているのです。その髪の毛が背丈に余るほど長いので、それを抜き取つてかつらにしようとして抜くのです。助けてください。」と言つたので、盗人は、死人の着ている服と、老婆の着ている服と、抜き取つてある髪を奪ひ取つて、（門の方へ）走り下りて逃げていった。

ところで、その門の二階には死人の亡骸が多かつたということだ。死んでいる人で弔いのできない死人を、この門の上に置いたということだ。この話は、その盗人が人に語つたのを聞き継いで、このように語り伝えているとかいふことだ。

「今昔物語」と「羅生門」の比較

共通点

- (1) 固有名詞や風物・世俗によって表彰されるところの京に都がおかれていたという(時代)
- (2) 怪しげなものが立ち寄り、死体が置かれているところの羅城門／羅生門という(場所)
- (3) 既に楼に上っていた老婆・楼に上ってきた男・死体の女という(人物)
- (4) 老婆は鬢にするために死体の女から髪の毛を抜く、男は老婆の振る舞いを目撃し↓取り押さえ↓話を聞き↓引剋をして↓逃走するという(行為)

相違点

- ① 男の境遇
  - ・ 撰津の国から盗みを働くために京へ上ってきた男
  - ・ 4、5日前に主人から暇を出された下人
- ② その日の天候
  - ・ 記述無し
  - ・ 申の刻下がりから雨が降り始めた
- ③ 男が門の下に到着した時刻
  - ・ 日暮れ前で、まだ明るいころ
  - ・ 暮れ方で、夕やみが空に立ち込めること
- ④ 門の下での男の思い
  - ・ 人通りがあるので、それが静まるまで待っていた
  - ・ これからの身の振り方について思案していた
- ⑤ 門の楼に登ることの理由
  - ・ 人に姿を見られては都合が悪いから
  - ・ 今夜は楼の上で寝ようと思ったから

「今昔物語」

「羅生門」

- ⑥ 男が目撃したものとその位置
  - ・ 死んだ若い女の髪の毛を手荒く抜き取る老婆を、連子窓ごしにのぞき見る
  - ・ 女の死体から髪の毛を一本ずつ抜き取る老婆を、はしごの口の所から実を低くしてのぞき見る

- ⑦ 男が老婆の前に飛び出した理由
  - ・ 老婆が鬼か死人か試そうとした
  - ・ 老婆が鬼か死人か試そうとした
  - ・ 老婆の行為を許し難いと思ったから

- ⑧ 男の老婆への迫り方
  - ・ そっと戸を開けてから、声を上げて、刀を抜いて走り寄った
  - ・ 突然飛び上がり、逃すまいとしてねじ倒して、太刀を突きつけた
- ⑨ 老婆の反応・態度
  - ・ あわてふためきながら、手をすりあわせで狼狽する
  - ・ 抵抗した後、目を見開いたまま執拗く黙っている

- ⑩ 髪を抜かれた女の境遇と、その女と老婆との接点
  - ・ 老婆の主人だった女で、死んだ後に引いをしてくれる人がいないので老婆がこの楼に置いた
  - ・ 蛇を干し魚だと偽って売っていた女(老婆の知人)で、老婆が楼で死体を物色中に遭遇した

- ⑪ 老婆が髪を抜く理由
  - ・ 髪の毛が非常に長いので鬢にしようにと思った。
  - ・ 生活の糧とするための鬢の素材を集めていた

- ⑫ 男が奪い去ったもの
  - ・ 死人と老婆の着衣
  - ・ 老婆が抜いた髪の毛
  - ・ 老婆の着衣
- ⑬ 男の行方
  - ・ 逃げ去って、後にこの話を人に語る
  - ・ だれも知らない

「羅生門」 芥川龍之介による結末の一文の書き換えについて

初出 「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。」

初版 「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急いでいた。」

改稿 「下人の行方は、誰も知らない。」